

まちづくり ニュース



ホームページ

<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Icho/3732/>

126号

2010年11月19日



ときわ台の景観を守る会

ときわ台まちづくり委員会

代表 鈴木博之 近藤洋子

事務局 島田晴子 tel・fax 3960-3869

協力金振込先 郵便局00110-3-739728 ときわ台の景観を守る会

○ 藤和マンション行政訴訟

・ 証人尋問

10月27日(水)522号法廷で原告Aさんの証人尋問がありました。予め陳述書も提出、弁護士からの質問にAさんが答える形で進行。向こう側弁護士も2,3質問、狭い道に巨大な建物を建てれば、人・車の流入も増し、災害時にも混乱を生じる、毎朝登校するわが子を見送るAさんにとっては切実な問題です。現に大型車は曲がりきれずカーブミラーは壊されています。道を部分的に業者に都合よく広げて、建たせてやっている行政は、区民の方を向いていません。

・ 景観ネットから応援

石原一子さんたちが傍聴に来てくれました。感謝。

・ 初傍聴Yさん

ニュースを見て、初めて傍聴に参加したYさんの感想は、小さい時社会科の授業で傍聴したときと比較して、刑事事件ではないせいか、法廷全体が優しい感じがする、ということでした。

・ 高裁へ控訴した日本建築センターの分

11月1日(月)午後、812号法廷で第一回の口頭弁論がありました。予想通り、建物完成後の訴訟利益はない、というひどい判断が最高裁の判決というだけで押し通され、比較的良識派といわれる裁判長も、従来の弊害を破る勇気もなく、気の毒そうな顔をしながら11月17日には棄却の判決、というスピード感だけの法廷でした。

この論理を崩すのは、今の日本では並大抵のことではできないと痛感しました。長いものに巻かれる日本人の体質そのもののの変革・既得権を振り回す土建国家そのものの解体、等々が必要だということに、一住民組織の私たちに何ほどの働きができるでしょうか。しかし、いつか必ず歴史が判決を下すことでしょう。

本裁判の最終口頭弁論は

12月8日(水)10時30分 522号法廷

○ 1970年台の 常盤台街並み写真展

11月25日(木)～30日(火)

於 ギャラリー服部

(日本書道美術館横)

都市計画家の金井一郎さんが、5月の写真展に見えた際、ご自分が昭和49年と51年に常盤台の街並みを撮影したネガフィルムを下さいました。

今回は、その写真と現在の写真を並べて展示します。

変わってしまった常盤台と、変わらぬ常盤台と、未来に向けて考えるよすがとなれば、と思います。

お誘い合わせてお出でください。

○ 景観まちづくり検討会(第4回)

11月14日(日)10時から、介護センター2階で第4回の景観まちづくり検討会が行われました。

今回はアンケートのたたき台の検討で、選択肢をいくつにするか、この質問は適当か、などの具体的なやり取りがありました。率直な意見交換ができていたようでした。常盤台に関心があり、勉強しようとする学生たちの熱意には感心します。

龍谷大の学生たちは翌日神奈川県秦野市のまちづくり条例を取材に行くとか。文化祭には常盤台を国立や鞆の浦と並んで取り上げてくれました。

他にも東大・千葉大・筑波大などの学生が参加。法学部があり、比較的近い立教大や、大東大の学生はどうしているのでしょうか。ましてや肝心の住民は？

図書館改築と放置自転車

十一月十七日、教育委員会の北川教育長、中央図書館の近藤館長と面談しました。

中央図書館の改築に際し、地域住民の意見を取り入れて欲しいのは是非ワークショップを開いてほしいこと、常盤台小学校裏の自転車を収容できる駐輪場を図書館の地下に作ってほしいと要望しました。

昭和四十五年に開館した中央図書館の建物・設備は四十年間そのままです。建築基準法上のさまざまな規制から、今の場所には同規模のもは建てられず、二十万冊の図書を収納し、さらに蔵書を増やしたり、快適な空間の図書館にするにはそれなりの規模が必要になります。まだ改築の詳細なスケジュールは何も決まっていません。

まずは地域住民が中央図書館のあるべき姿を思い描いたり、語り合う事の出来るプレワークショップを開くことを提案します。多様な意見を集めてはつきりとしたビジョンを区に示すことができたなら、中央図書館改築という区行政の優先順位をあげることができると思うのです。地理的に区の中央に位置している常盤台は板橋区の文化拠点のひとつになりえるのに、今の中央図書館はあまりに寂しいです。

私は駅前の三井住友銀行横の今は駐車場になっている土地に、図書館、ギャラリー、児童館、集会所や会議室などの複合施設を作り、その地下に千台規模の駐輪場が作られたらなんと素敵なことかと夢見るのです。

Y・K

目から鱗 —「デフレの正体」—

今サラリーマンの間でベストセラーになっている「デフレの正体」という新書があります。内容はバブル崩壊以降の失われた二十年の閉塞感に覆われたデフレ社会の真相は「団塊世代の一時退職—彼らの年収の減少—彼らの消費の減退—内需対応産業の一層の供給過剰感—同産業の商品・サービスの値崩れ—同産業の採算悪化—同産業の採算抑制・人件費抑制—内需の一層の減退—国内経済の縮小」と言う流れが原因であると言っています。

生産年齢人口（十五歳から六十四歳）が一九九六年ごろから減り始めている。決して「景気循環」だけで説明できないと細かい数字や地方間のデータ駆使して説明しており、大変参考になり「目から鱗」の読み物です。

団塊の世代がいなくなった二・三十年後の日本は生産年齢人口が三—四割減っています。その時の日本の姿を次の様に予測しております。

「戦後半世紀を支配した都市開発地域拡大・容積率上昇・土地神話と言ったものは全て崩壊しています。人口減少に合わせて土地開発地域を縮小し旧来の市街地や農山村集落を再生し中途半端な郊外開発地は田園や林野に戻し個性を持った都市景観の復活が図られます。容積率を下げて安普請の高層建築物をスカイラインの整った中低層建築物に建て直す『減築』も当たり前になる」と論破しております。

如何ですか皆さん、将来像の実現を皆さんの力で少し早めませんか。

Y・N

常盤台公園のはなづくり

十一月十二日にチューリップの球根その他を植えました。例年より多く注文し、一人が健康診断と重なって欠席したせいか、三時間ほどの労働になってしまいました。苗の数も適量を考えないと・・・

冬に入る前の穏やかなこの季節は良いものです。贅沢でなくても美味しいものが食べられ、苦痛なく歩けるだけでも幸せ！と感じるこの頃です。病気の人が、老いて一人では何もできなくなった人、借金に追われている人、などが多い中で、「徒然草」で兼好が言う「名利に使われて」生きなくてもよい、ささやかな幸せをかみ締めます。

花づくりの会の人たちの動きは、その日何をするか、簡単に打ち合わせることもありませんが、相談など無いことが多く、その都度必要に応じて自然と分担して作業しています。個々の人が自分のペースに合わせて作業するので、負担に思うことも無く続いているのだと思います。何より、皆が花や植物が好きだから、何の報酬もないボランティア作業でも満足できるのです。

組織というと会社人間はすぐ上下関係を作りたがるものですが、この会にはそんなものはありません。自由・平等・おもしろい、そういう単純で大切なものがあるようだ、というのは自画自賛になりましたでしょうか。

定例会十二月十一日（土）七時

「ギャラリー服部」にて